

短編小説



和田守道（儀丹）の墓

山武市指定文化財（史跡） 和田守道（儀丹）の墓（成東）

和田儀丹は下総佐倉の酒々井に生まれ、成東の下町に住み、道学を講じ、上総八子の一人には含まれないものの、「姫島講義」中で稲葉黙齋が「上総諸生之学タルヤ、酒井氏ニ始マリテ和田生ニ成ル」と記されており、上総八子よりも別格な存在だったことが窺えます。

寛保四年（一七四四）に五一才にて歿し福星寺の境内の墓地に葬られています。

絆坂ふたたび

五反田 竹内 克隆

(一) 傘寿の涙

昭和が急せくように遠くなり、平成も少しづつ色褪せてきて、令和の世(二〇一九)に変わり早くも五年になった。だが、どんなに世が進もうとこの辺りだけはいつも不変に思える。そんな山武郡の某所、伊林家いばやしの周囲は今年も桜の季節が終わると、鮮やかな緑一色に覆おわれてきた。

陽春の皐月、伊林いばやし彬は誕生日を迎えた。人生の集大成、八十歳である。快晴のある日、年中行事の一つになっている、家屋敷に隣接する百五十坪程の畑の草刈りを終えた。

「ウーッ暑い。今日は夏日か、母さん水をくれ」

汗を拭きながら玄関を開けると、どかっと椅子に腰をおろした。

「ハイご苦労さん。大変だけど耕耘機もお願いね。私には重くてもう無理だわ」

妻の久枝ひさえが大きめのコップに水を入れながら答えた。

「分かったよ、けど少し休ませてくれ。今日は蒸し暑いし、刈払い機も重くて堪える。やっぱり年かな」

一気に飲み干すと、もう一杯とコップを出した。

庭には久枝の丹精のバラとガーベラ、アイリスが美しい。雨の季節を目前にした紫陽花の蕾がうっすらと色を浮かべてきた。カサブランカも主役の座は渡さんと準備を整え始めた。

「いよいよ傘寿か、よくぞここまで生きたね。これからオマケの部分、母さんの年まであと七年、いつ召されても潔いさぎよくありたいね」

「私も後期高齢者、別枠になった感じでの先どうなるのか、考えると嫌になるわね。身体も弱ってきたし、何よりも惚けが一番心配。物忘れも多くなってきた」
久枝は七十五歳を機にジムに通い出し、ハーモニカやカラオケも熱心につづけている。

「八十になったので自分史でも書いてみようかな。ドラマ風にね」

「いいじゃない。想いをこめて好きに書いてください」
軽い冷やかしを交えて久枝が言った。

「さあて、もう少し頑張るか」
刈払い機を片付けると耕耘機のエンジンをかけた。

その夜、晩酌をやりながら自分史の構想を考えてみた。多少の酒が入ったほうが頭の回転が良くなる。若いうち

から習慣化した思考回路の一策である。居間のソファで横になると瞑想するように目を閉じて、生誕からの歴史を振り返った。

伊林家の生業なりわいは農業であった。所有農地は少ないので零細農家の範疇に入る。家族は両親に祖父母、妹、弟の七人家族だった。彬は農家の長男だが農業を知らない。何故ならば父が勤め人を選択させたからだ。

「こんなちっぽけな農家では将来がない。お前は百姓をやるな、勤め人になれ」

口癖のような言葉に決心を固めたのは、小学六年生の時分だった。

この家に婿入りした父は元々は勤め人で、戦後の混沌・混乱の時代に農業へ転身したが、旧職への悔恨の念もあり、息子に夢を託したのであった。父はやがて兼業農家として家計を支えるようになる。

養子だが実質家長とも言えた母は父以上の熱心さで、彬に寄せた思いと期待は相当なものだった。その厳しさや愛情を一身に受けて成長した彬の心には、まさに母親と一心同体の絆が生まれていった。

酔いが醒めると外気に触れてみたくなり庭に出た。夜

空の星を見上げると目頭が熱くなった。すると、自分史の主題になるであろういつしか「絆坂きずなざか」と名付けたあの坂道を歩く母と自分の姿が、六十五年の時空を超えて甦ってきた。この坂道こそが母子の絆の原点と言えるものだった。

そして、呼応するように愛唱歌の一つ、さだまさしの「無縁坂むえんざか」を口に出した。

母がまだ若い頃 僕の手をひいて

この坂を登るたび いつもため息をついた

・・・

運がいいとか 悪いとか

人は時々 口にするけど

そういうことって 確かにあると

あなたをみてて そう思う

忍ぶ 不忍しのばず 無縁坂 かみしめるような

ささやかな 僕の母の人生

母の生き様をこの歌になぞら準えるのは不適切だが、どこか似ているものを重ねてしまう。歌い終えると、生涯忘れられない遠いあの日の琴線に触れた光景が、涙を連れてきて止まらなくなった。

(二) 思いがけない遠出

昭和三十三年（一九五八）の秋、中学三年の彬は高校受験を控えて勉強に励んでいた。だが、プロ野球も気になつて集中できない。それもそうだが、巨人軍長嶋茂雄選手の手日本シリーズデビューで、ラジオから流れる実況放送の一打一打に耳を澄ます。その時、母の声があった。

「彬、野球なんて聴いていないで集中しないとダメじゃない。受験は失敗できないよ」

仏壇の花を取り替えるのか手にした菊を持ちながら、ラジオのスイッチを切った。

「今度の日曜に出かけるからね、お前と二人きりでね。その時の分まで頑張りなさい」

どこへ行くのだろう？想像したが思い浮かばなかった。

母が去つてからまたラジオを聴いた。結局このシリーズは三連勝から四連敗で巨人の逆転負けとなり、立役者の西鉄・稲尾投手は「神様・仏様・稲尾様」と流行語になるほど称えられて、後々まで語り草になった。

八日市場駅でSLを降りると町なかを通りぬけた。そこには殷賑の歴史が流れており、我が町とは格段の違いがある。小学校時代には「祇園まつり」に連れて行って

もらったこともあった。踏み切りを越えて五分ほど歩くと大きな池が見えた。道路はこの地区のメイン通りの一つだろうが、舗装などなく砂利道には草が密集しているところもあった。

今日の母は着物姿、十一月も近いが快晴で気温も高く汗ばんできたので、持参した日傘を差した。左手の風呂敷包みは手土産だろうか、途中から彬が持った。

母の名前は雅代、三十九歳、伊林家の後継ぎ娘だ。子供ながらに綺麗な人だと思う。先を歩く後ろ姿に野球仲間という言葉が浮かんだ。

「お前の母ちゃん美人だよな、女優の淡島千景みたいだよ」

こう言われると誇らしさとともに、同じように思う自分がいた。

「一体どこへ行くのだろう？母の目的は何だろうか？」この疑問はまだ解けていない。無言を貫きながら後をついてゆく。なだらかな坂道が見えてきた。

「もう少しだよ。この坂を登ればすぐそこだ」

駅から十五分も歩いただろうか、母がハンカチで額の汗を拭いながら言った。坂道は左方向へ曲がりだした。土地の産土神うぶまがみと思える神社が見え、その境内には多くの子供たちがメンコや馬跳びで騒いでいる。

間もなくすると店の看板が見えてきた。正面には「日常百貨・藤井商店」の横看板が大きめに掛かり、手前には小さな縦看板が掛かっていた。平屋造りの大きな店舗であった。この界限には他に店がないので、この家が地区の中心になつているように思えた

店内に入ると食料品に味噌、しょうゆ、塩などの調味料、菓子類、酒類に陶器・金物など何でも揃つていて、さらに「鮮魚コーナー」もあり、調理の男性が忙しく包丁を揮つていた。今でいえばスーパーマーケットというところだろう。

店員と思える女性が二人で買い物客に対応しており、レジにはもう一人女性がいた。

(三) 初めて知った事実

「ごめんください」
母が声をかけると店員の高齢の女性が振り向いた。

「いらつしゃいませ」

年齢は六十半ばくらいで、優しい感じのその人は少しの間、母を見つめてから驚いたように声をかけてきた。

「あら！もしかして雅代ちゃん、そう雅代ちゃんよね？」

「突然ですみません。そうですタカおばさん、雅代です。

お忙しいのに失礼しました。ちよつと八日市場まで用事があつたので寄りました。お懐かしい」

「何年ぶりかしら、もう分からないほど昔ね」

高木タカさんというその人は目を潤ませて母の手を握りしめた。母も感激極まってタカさんを見つめて言った。

「三十年ぶりくらいですかね。十歳くらいの頃、一度父（義父）と一緒に来たことがあります。立派な店になりましたね。この子が私の長男で中学三年です。ほかには女の子と男の子がいます。タカさんのことはいつまでも忘れません。まさか会えるなんて思わなかった。本当に嬉しいです。父さん、母さんは元気ですか？ちよつと挨拶したいのですが」

「父さん、母さんって何故？」

彬に咄嗟の疑問が生じた。

「ちよつと待つて雅代ちゃん」

そう言うのとタカさんはレジに向かい、女性に声をかけると何やら話し始めた。その人は母と同じくらいの年恰好で、品のいい綺麗な面差しだった。そして、間を置かずレジを離れ母と彬に近づいてくると笑顔でこう言った。

「こんにちは、お初にお目にかかります。藤井啓子と申します。どうぞ父に会ってください。こちらへ」

「えっ、もしか母の生まれはここか？この人は姉妹？」

彬の脳裏に閃光が走り、事実の解明に動き出した。思索をつづけたまま案内されて店の裏手の住居に入った。居間には炬燵に入りタバコを啜くわえて庭を眺めている老人がいた。

「父の栄太郎です。お父さんお客さんですよ」

「……」

啓子さんが声をかけても無言で外を見ている。年齢は六十後半くらいに見える。頭髪は白く無精ひげを生やしているが顔立ちは端正だ。だが、宝物でも失ったように茫然自失な表情をかいま見た。

「どうぞ、お話なさってください。お茶を淹いれてきますね」

啓子さんが立ち去った。

沈黙が流れる。老人の目は相変わらず外を向いている。母はその形を凝視なごしている。そして堪えきれずに声を発した。

「お父さん雅代です。お懐かしいです。元気にやっています」

「……」

老人は何も応じない。

「雅代です。貴方の娘です。私の息子です」
母のトーンが一段上がったように思えた。

すると老人が母と彬を睥睨へいげするようにやっと口を開いた。「何だ、雅代か。今になって何しにきた。何の用だ」顔からは感情を失った青白い色とタバコの白煙が漂っている。

「それはないでしょう。何も用事はありません。お顔を見ただけです」

母は思いのほか短気なところがある。途端に目元が朱に染まり涙が滲んできた。彬も不快感で両手が震えてきた。「よその者に用事も話もない。帰ってくれ」

老人は横を向くと無精ひげを撫でまわして口から煙を吐いた。

「分かりました、帰ります。どうぞお元気で。さあ彬、帰るよ」

手土産を置いて立ちあがった。ちようとタカさんがお茶を淹いれてきた。

「父に会えたのでこれで十分です。もう来ることはありません。どうぞお元気でね」

急いで涙を掌てのひらで拭うと懸命に声を出した。

「雅代ちゃん、貴女も元気でね。いい息子さんで安心ね。お幸せにね」

タカさんは母に住所を記入させるとていねいに折り畳んでポケットにしまった。

店の中では啓子さんが忙しそうにレジを打っている。母の姿を目にするといいねいにお辞儀をした。母も同じように返して、さらにタカさんに目線を送って店を後にした。

母は一目散に歩を進め下り坂に差しかかると歩きながら言った。

「彬、この坂を振り返ってはだめだよ。前だけ見なさい。お前もよく分かったよね、私はあの家で生まれたのよ。あの人が父親で貴方の本当の祖父。私の母、貴方の祖母のことはよく分からない。三歳の時に山武郡に来た。今の両親に子供がいなかったの、養子にもらわれたわけ。それから色々あったけど、私はすべてを受け入れて過去は振り返らないことを心に決めた。お前たちと一緒に新しい歴史を作りたい。それが私の夢」

彬は信じがたい母の数奇な出自を知った。そして、反動的に苦悩の胸の裡を息子として受け止めてあげたいと思った。

「彬、食事して帰ろう、好きな物を食べなさい」
二人でカツ丼を注文した。母の目元の薄化粧には涙の痕が不仕合わせそうに残る。

その後、母は今日のことは金輪際、家族の誰にも言わなかった。自分の胸にしまいこんで封鎖したままこの世を去った。

(四) 十七回忌

彬は父母の期待にこたえて県立の商業高校を卒業すると、県の東部を主な営業基盤にしている信用金庫に就職した。職場では鋭意業務に精励をつづけて、また、世故に長けることも適宜であり、順調に昇進して支店長を二か店任された後、本部の部長を務めた。

妻の久枝は五歳年下、同じ職場で知り合って結婚した。二人の娘を授かり今は共に東京で所帯を持ち、三人の孫は社会人と大学生である。

公務員になった妹の明子は千葉市に在住し今年喜寿を迎える。旦那も同い年で公務員、二人で温泉巡りが楽しみらしい。兄弟で一番の秀才だった弟の高志は、大卒後大手ゼネコンを定年まで勤めあげた。今年で七十四歳、住居は相模原市に構え、夫婦でスポーツ好きである。

秋の彼岸も過ぎた九月の末に彬は父母の十七回忌を思い立った。存命であれば父は百九歳で母は百四歳になる。妹弟も快諾し、住職の了承をいただき十一月の初めに行った。

高志の妻澄江^{すみえ}さんが来られなかったが、久しくなかった対面に沸き立った。

「なかなか実家に帰る機会がなくて、本当に久しぶりだね。兄貴いい企画で良かった。澄江は腰痛で残念、テニスのやりすぎかな。みんなによるしくと」

高志が父母の写真を見上げながら言った。

「私は千葉だからいつでも来られるけどいざとなると億劫になる。でも今日はみんなに会えて良かった。兄貴ありがとう」

明子が母の写真を見つめながら言った。

住職の読経の後、揃って墓参して卒塔婆を据え線香と花を手向けた。お墓は家から至近の共同墓地で、この近辺の家はここで先祖代々守りぬいている。

四十代の住職は先代から後を継いで間もないが話好きで楽しい人である。自宅での忌中払いでは比叡山での修行のことや、精進料理のことなど仏界の話に興味津々に聞いた。

住職が退出した後は両親の葬儀の話が復活した。わずか十日で二度の葬儀なんて滅多にないことだ。大騒ぎした当時が鮮明に残る。

「養子に婚さんである二人はこの家の開拓者みたいで戦友の気分だったのでは。『唇亡びて齒寒し』^{くちびるほろ}なんて諺^{ことわざ}も

あるように、一人では生きられなかったのさ」

高志の諭^{たま}えにみんな頷いて散会となった。

(五) 母の秘話

法事が終わっても彬の心に棘のように刺さって未だに抜けないものがある。それは母が最後まで閉ざしたままだった胸の裡を知ることである。

手がかりを求めつづけても暗中を模索するようで、解決の糸口は見えそうもない。両親の遺品を整理するたびにその可能性を探っても、それらしきものは残っていないかった。

だが、思いは通じた。仏壇の中身の再整理で、その抽斗^だの奥に残った紙袋が盲点だった。紙袋の中にはさらに箱に入れた「母の歴史書」のようなノートがあった。茶色に変色したそれには表紙に「恨・忍・希」と記^{しる}されていた。ついにたどり着いた。このノートこそが真実そのものであった。

母と彬が訪ねた後日にあのタカさんが機会を作ってくれて母と会い、当時の藤井家の事情を教えてくださいました。あった。

生家藤井商店は母雅代の生まれた頃はまだ小さな店で、

酒・醬油・塩が主だった。近隣のタカさんは父栄太郎の幼馴染で二歳年下、兄妹のように仲がよく切望されて店を手伝い、藤井家の家族の一員みたいな人だった。幼少の雅代のことともたいそう可愛がってくれた。父も仕事熱心で才覚もあり店は発展してゆく。

変化が起きたのは雅代が二歳の時で弟が生まれた頃だった。身体の弱い母親のハツは産後の肥立ちが悪く、台所も難儀のため心配した父は女中さんを募集したところ、二十歳を過ぎたばかりの「綾^{あや}さん」がやってきた。

父より十歳近くも年下のこの人は、愛想が良く気が利いてしかも容貌もかわいい。すっかりお気に入りのお父は熱中して、心は次第に女として見るように傾注してゆく。そんなある日に事件が起きた。

ハツが里帰りしている時に父と綾さんは男女の仲になり、綾さんのお腹には子供が宿った。啓子さんである。帰宅したハツは激怒して即座に離婚、一歳の息子と家を出たまま戻らなかった。

結局、後添えに綾さんが入り、父母の愛を失った雅代が藤井家と親しい人の世話で養子に出された。その人は伊林家の祖父とも知り合いだったようだ。

店はタカさんの協力もあって盛業をつづけてその後、一人娘の啓子さんが後を取った。

しかし、「好事^{こうじ}魔多^{まお}し」最愛の綾さんが六十を前に早世した。氣力をなくした父は抜け殻のようになった。母と彬が訪ねた時がまさにその最中だった。

後日、啓子さんが伊林家を訪ねたようだが、母はお互いの運命を甘受して交流は峻拒^{しゅんきょ}したと記されていた。彬は生家への怨念にも似た母の意地を見た。

読後、強い衝撃を受けたが冷静さを取り戻すとノート
の標記を分析した。「恨は両親への恨み。忍は我慢して耐えること。希は夢と望み、三人の子供に託したもの」
母の人生が凝縮されたものと解釈した。タカさんへの感謝とともに仏壇に線香を灯した。

「母さんようやく貴女が分かりました」手を合わせてつぶやいた。

(六) 一期一会

母の歴史を解明できた今、自分史に多くの部分を割いたその思い出に終止符を打ちたいが、今ひとつ心残りがあった。もう一度「絆坂」を通りあの家を訪ねたくなつた。けれども何で今さら、済んだことへの躊躇^{ためら}いは強い。悩んで久枝に話してみた。

「行ってみたら。坂道を登ってみたら。何もなければそ

れでいいじゃない」

背中を押されて彼の地を訪ねることにした。

年が明けて一歳また年をとった五月に車で出かけてみた。そこにはもう昔の面影はまったくない。道路はきれいに舗装され、池は埋め立てられ、民家が立ち並んでコンビニも見えた。舗装された「絆坂」の傾斜は昔と同じく緩やかだが、坂道が終わると住宅地が広がっていた。わずかに神社だけが昔のまま残っていた。

すでに藤井商店はない。車を近くの空き地に置いて歩くと「藤井勇次」という表札が見えた。モダンな立派な家である。

「ここかな？」思いきってインターホンを押した。家から同じ年くらいの男性が出てきた。

「突然にすみません。山武の伊林と申しますが、実は母の生家がこのあたりにあります。大昔に訪ねたことがあります。懐かしさに寄ってみました。藤井商店という大きな店です」

彬は「麻雀・川柳会会長」の肩書きに電話と住所も記された名刺を出した。

「さあ、うちも藤井ですが知りませんね。この辺に藤井は何軒ありますが、すっかり変わりましたからね。申し訳ないですが」

警戒の構えを見せたが、同時に一瞬のリアクションを彬は感じとった。

「そうですね。失礼いたしました。半世紀以上も前ですものね。それでは」

辞去すると回りを眺めながら車に戻った。

それから半年が過ぎた十一月に手紙が届いた。差出人は藤井勇次と記されていた。読んでみると会って話をしたいと書いてある。

「やっぱりあの家だったのか、そんな気がしたよ」

「従兄弟になるわけよね。行ってよかったじゃないケジメになるね。それからは二人次第」

久枝も喜んでくれて、彬は快諾の返事を認めた。連絡を電話でやりとりした後、八日市場のレストランで会うことになった。

勇次さんは彬より二歳年下の七十九歳で彼も母・啓子さんから話を聞いて心残りを抱いていたのだ。自己紹介とこれまでの人生を話し合った。食事にノンアルコールの飲料が加わるとさらに話が進んだ。職業のこと、家族のこと、趣味や健康のことなど話し合った。

「貴方のことは過日に母から聞きました。店は時代に合わなくなつたので平成の初めに閉鎖しました。母同士は

異母ですが姉妹、私と貴方は従兄弟になるわけですね。あの世に行く前には是非とも会っておきたかった。機会を作ってくれたことに感謝します」

「私も同じです。もやもやが消えてすっきりしました。本当によかった」

ともに笑顔で握手を交わした。

二人の境遇や奇跡的な出会いを人生の妙味と捉え、余生の健勝を祈念して別れた。その後はお互いにこの出会いを区切りとして交流することはなかった。

年が変わり春の彼岸が過ぎた頃、彬は久枝と二人で旭市の病院に久枝の妹を見舞った帰り道に、車を絆坂に向けた。

「母の生家を見てくれ。あの頃はでかい店だったんだ」
藤井家の前に来ると少しスピードを緩めた。

「ここがお義母さんの故郷だったのね。あら、おしゃれな家なこと」久枝が目を凝らした。

彬は表札の藤井勇次に門扉、静かな佇まいを横目にしながら、変わりないことを確認して坂道を下り始めた。そして、歌い出した。

母はすべてを 曆にきざんで

流して きたんだらう

悲しさや苦しきは

きつと あったはずなのに

・・・・・

忍ぶ 不忍 無縁坂 かみしめるような

ささやかな 僕の母の人生

今年も春がやって来た。坂道が終わると、道の両側には咲き始めた染井吉野が見えてきた。

（本作品はフィクションであり登場人物や出来事は架空のものです）

嵐に立つサンガ

殿台 吉田 満春

二〇二四年、福岡で厳かな式典が行われた。七五〇年前（文永の役・一二七四年）にモンゴル軍が福岡に上陸、鎌倉武士団との闘いが行われた「元寇」を記念した式典であった。日本に留学経験のあるモンゴルの会社員は、「日本の人が、かつての敵に対する慰霊の碑を建ててお祈りしていたことを知って驚いた」と語ったと報じられた。

鎌倉に戦勝が届いたのは文永十一年十一月一日過ぎであった。十一月六日に京都に届いたと「五檀法日記」にあり、この日記は、応和元年から文永十一年（一二七四年）までの約三百年間にわたって、簡潔ながら克明に記されている。京都鎌倉の距離四七〇キロを馬で走らせると、三日あれば着ける距離である。大宰府から鎌倉までは遠い飛脚でも一二日半かかったとされ、このため蒙古が対馬に襲来したとの知らせは元軍撤退の後であった。モンゴル軍は、一〇月五日、対馬、壱岐を襲い、二〇日には北九州沿岸に押し寄せ博多をめざした。軍船九〇〇艘、兵二七〇〇〇〜三九七〇〇人であった。武士たちは奮戦したが、博多に元軍が入り、大宰府に退いた。午

前八時から始まった戦闘は、夕刻過ぎになると落ち着き、翌二一日朝には博多湾から元の軍船は消えていた。元軍は夜間の撤退を強行し海上で暴風雨に遭遇したため、多くの軍船が崖に接触して沈没、高麗軍左軍使・金佖が溺死するなど多くの被害を出したと伝えている（金剛集）。

元軍は地理不案内の海岸近くに陣を構えることを止め、軍船に兵を戻らせ、入り江に待機したが、夜半から暴風が襲い壊滅したのであった。今日の定説では、一〇月二〇日は太陽暦の十一月二六日であることから、台風ではなく大型の低気圧の発生によるものとされている。高麗史によれば「軍の還らざる者は一萬三千五百餘人」と文永の役を総評している。

翌日の十一月一日は、縁起が良いと占定うらひだめにあり、執権北条時宗は急遽、鎌倉八幡宮に戦勝報告に参詣した。北条得宗とくさうの係累の者、有力御家人を含めて五百人の参列者が集まった。雲一つない青い空の下、色取りも鮮やかな幟、お供のする人の美しく装い飾り立てた行列を見ようと貴賤の人々で街はあふれた。紅い紅葉や銀杏の黄色の山々はわずかとなって、晩秋の色を濃く滲ませていた。「正に日本晴れとは目出たい」

義父の安達泰盛は安堵とともに聞こえるように口を開いた。久しぶりの平穏が鎌倉に戻ってきた。昼過ぎに粉

雪が舞った。

この時、時宗は二四歳の若武者であった。北条一門は一枚岩ではなく、執権職を窺う分流がいて危い体制であった。時宗を支えたのは安達泰盛で、一〇歳の娘を時宗に嫁がせて得宗家との結びを固めた。同じく寄合衆である平頼綱の勢力は御内人^{みうちびと}で、得宗外戚を代表する泰盛との確執は深まっていた。時宗死後、元寇の論功の対応から安達一族郎党は平頼綱によって、泰盛の一族五〇〇名余りはことごとく殺戮された事件は、双方の難しい舵取りをしなければならなかった時宗の苦悩の証左であった。

文永元年（一二六四年）に、モンゴルのフビライは兄弟間の継承戦に勝利し、第五代ハーンとなった。文永五年（一二六八年）正月、高麗の使節がモンゴル帝国フビライの国書を持って大宰府を来訪、蒙古への服属を求める内容の国書が鎌倉へ送られた年に、時宗は第八代執権となったのである。わずか一八歳の若武者であった。

「相手は恭順を求めているということだ。友好に見せかけて、野心があるのは明らかである。我らが一つになつて戦うしかない。事後、返書の件は議論ならぬ」

返書の件は時宗が独りで決めた。泰盛は評議を終えた後に、時宗の室に入って、

「これでよろしいかと存じます。宋はモンゴルに攻めら

れ、高麗は服属し、日本を狙うモンゴルには無視こそ最良で、執権の力を津々浦々お示す機会かと存じます」
頼もしくなった青年に感激して述べた。

鎌倉は返書を出さない事に決し、西国の御家人に沿岸の警備を命じた。フビライはその後も使者を送り、文永八年九月の五度目の使者団は百名であった。その他博多には難を逃れた高麗人、南宋人が漂着し、モンゴルと高麗の関係が分かってきた。それによれば二十四代高麗王はモンゴルに服従し、軍船建造のため山の木材を切つたため、はげ山となり、兵糧も搬出され、フビライに忠節を証明するために王は侵略の先鋒を願ひ出たという。

時宗は前執権の北条政村や義父の安達泰盛、北条実時・平頼綱らに補佐され、土地台帳の作成、御家人の所領譲渡制限、異国警固体制の強化や、異国調伏の祈祷などを行わせた。朝廷が作成した返牒案も採用しなかった。武力でしか国を守れないという時宗の意志であった。壇ノ浦で平家を滅ぼし、源氏の棟梁源頼朝が武家政権を開いたものの、頼朝急死後は北条一門が頼朝の幕府を篡奪したと見なされていた。それ故、執権政治は弱さを見せられないのであった。

高麗は王子を人質として差し出しフビライに隷属し、

宋も降伏か交戦かでもめていたのであった。宋から逃れた流民の情報は鎌倉に送られ、フビライの狡猾な外交を知ったのである。フビライの外交は忠誠を誓い、朝貢を約すれば平和を与えるとするもので、到底受け入れられない服属要求であった。

文永の役ではモンゴル・高麗軍を退けたが、こちらから高麗に乗り込む案が九州御家人から出された。翌年の建治二年、高句麗に攻入る征伐軍の編成を終え、北九州を統治していた少式経資は、九州御家人に領内の船数、水手、舵取を報告させている。博多湾岸に現代も残る石塁を構築する動員も命じていたが、同時には出来ないことが明らかになり、国防強化に専念することにした。攻める方は守る方の倍の戦力が必要なのである。

文永の役の教訓から、第一線で圧倒的に勝たねばならず、海上の勝利こそ必須である。時宗は伊予の御家人河野通有を鎌倉に呼び寄せることにした。

建治三年六月、通有は伊予から船で由比ガ浜に乗り付けた。河野氏は瀬戸内海の子業にして、伊予国（愛媛）の豪族であった。壇ノ浦の戦いにおいて水軍を率いて源氏に認められ、鎌倉の御家人となることで、伊予を安堵されていた。

通有は元軍を破る秘策を胸に収めていた。通有はいく

つかの縁側に廻された廊下を伝わって案内された部屋に入った。庭から届く明りはわずかで、板の間に控えていると、背後から足音がして、二人の男が通有の左右に控え、上座に置かれた円座に直垂に烏帽子の男が座ると、「得宗殿で御座る」と脇の男がいった。

引見した時宗は、意外に思った。目の前の者は、水軍の頭とは思えない細い身体であった。（海賊にしては頼りない）

時宗が感じた程、通有の背は低い。通有は察して、「得宗殿、海には大男は不要であり、俊敏な小男こそ伊予の武士の誉であります。船戦には水手、梶取があり、船を進め方向を定める者であり武士とは違います。伊予の武士は、矢戦に長け、船に乗り組み相手を伏す武術を身に付けております。それ故に、長弓は少なく短弓にて舵取り、水夫を倒せば船は操舵が出来ず、海に浮かぶ箱のごとく、火矢にて船を燃えさせます」

義経が用いた水手の射殺は伊予の海賊から学んだものであったとも解説した。時宗は通有の落ち着いた話し方に満足し、蒙古対策に述べてみよと催促したのは、益々興味を湧いて来たのであった。

「先の戦いでは、モンゴル兵わずかで、宋の降兵、高麗兵が主でありました。モンゴル兵は騎馬が得意と聞きま

したが、海上に揺られ馬は弱ったのかわずかの騎馬でありました。混合兵は最初から腰が引け、弓の矢が尽きると防戦に回り、後ろに控える頭が目立つので、我らは指揮官めがけて矢を放ち打ちとると、兵惑乱し、逃げ惑う有様と聞こえまして御座います」

通有は冷静に説明した。

「文永の役では蒙古軍四万人、水手は三割の一万五千人、兵站の者一割二分ほどの五千人が非戦闘員で、交戦兵数は二万人」と解説、戦闘絵図を示した。

推定する蒙古、宋軍、高麗軍合わせて最小は二万七千人、軍船七二六隻、最大は三万七千人、軍船九百艘と歴史家の見立ては様々である。軍船には家畜、馬、食料、水、武器等様々な補給船がいたであろうから、半分は非武装の船ということになる。

「対して我らは五千三百騎、郎党集めて一万人でしたが、守る側には小さい城砦から押し出しては引く事も出来、攻める蒙古軍は守る日本側の三倍の兵が必要でした。幸いにも蒙古軍の兵不足により勝利しましたが、次回の総兵力は十五万と見ております」

「何と十五万！」

時宗は思わず叫んだ。

「しかし、戦闘に参加できるのは多くても六万余、我ら

は二万もあれば撃退できます。これをご覧下さい。西の今津から東の香椎までを石築地とし防塁とします。防塁を守る兵は一万、遊軍を一万とします」

通有が指した防塁の長さは現代の単位で二〇キロメートルに渡り、百メートルごとに百人、騎馬武者を後方に置いていく。防塁には騎馬が後方より登れる土坂を内側に作り、急襲できる工夫が設けられた。文永の役では水際に防げず博多、筥崎から撤収した経緯があった。時宗は防塁の範囲を広げることを約した。

「戦の中心は陸にあらず、海上にあります。元軍が手薄な補給船、水手の船を襲えば、水、食料、武器を失い、混乱し自壊は必定」

「船か……無防備な船を狙うのは妙案だが、うまくゆくのか」

「潮の流れこそ勝機で、潮目を知っている我らこそ有利であります」

通有の顔には自信があふれていた。

「戦には時期というものがあり、味方が好機であれば相手は不都合というものであります。我らは海に囲まれておりますから天然の堀を持ちますが、相手は海を渡って来なければならず、日本海は冬の間は荒く、来るとすれば春、夏問わずかの季節、海を渡る間に船も兵も疲弊し

これは不利で。我らは焦らず待ち構える有利さがありまする」

その夜、時宗と数人の側近を交えた宴会が開かれた。しばらくして通有は末席に座る黒衣服の僧に気付いて、側近に尋ねた。

「あれなる僧は大休正念禪師でござる」と囁いた。

時宗が南宋から招聘した臨濟宗の僧で、建長寺三世住持である。

「驚かれたか」

時宗はからりと笑を浮かべ、

「水軍では戦死した仏を区別なく弔うというのが誠であるうか」

乾いた喉に押し出すような声であった。伊予水軍の戦いを聞いて、敵軍を弔うということは信じ難いことであった。

「誠であります」

若い執権は相手に酒を勧め観察する技に優れていた。敵味方の吟味こそ祭りごとの根本であった。

「先の壇之浦の戦では、平家の死体はそのままにされたが、その後、漁が不振となり、ある船が流れ仏をみつけると拾い上げて埋葬したところ、大量の魚が取れていつのまにか漁師の間では、流れ仏に会うと漁を授かると信

じられ、浦繁昌うらはんじょうといつて喜ぶ風があります。漁の出がけにみつけたときは『帰るまでそこで待っておれ』という、奇妙に元の位置から動かないものだったり、拾い上げるとき水死体に向かつて『漁をさせてくれるか』と問いかけ、他の人が『させます、させます』と答えてから引き上げるものだったりします。面舵おもかじ（右舷）から引き上げ、取舵とりかじ（左舷）から陸に降ろす。死体を乗せた船の舳先には薦こもや白木綿を巻く風習もあり、瀬戸内海では、流れ仏を恐れもし、崇めるようになりもうした」

己を尊大に見せる武者の中で通有の挙措には心がある。このような人こそ得難い武人である。時宗は大いに頷き、「文永の役では数万もの仏が波間に浮かび、そのままにしたところ、魚が消えてしまったという。禪師にこの現象をお尋ねしたところ、仏となった骸は、魚、蟹、蛸が食べ、それらを食す人間は共食いとなり、知らぬとはいえ六道のうち餓鬼、畜生を合わせた鬼畜にほかならず、我が国の民を殺し、暴虐無道の輩とはいえ、仏になれば骸を拾い、弔うことは我が国法の礎とすべき心であり、通有の水軍の作法を広く九州の者にも伝えてもらいたい」

時宗は熱く説いて禪僧に顔を向けた。

「三〇年ほど前、父時頼が道元禪師を鎌倉に招いて、禅の心を訊ねたという。いたずらに見性を追い求めず、坐禅

する姿そのものが仏であり、修行そのものが悟りであるという。わたしは通有に乗り移り、戦に臨むであろう」

時宗は通有を認めたことになる。

「幾千の僧が戦勝祈願を唱えながら、仏となった総ての兵に鎮魂の祈りを捧げるべく、拙僧は九州に渡るでありますよう」

と大休正念禅師は合掌した。

「ありがたや得宗殿が敵味方なく弔う大慈悲こそ、我ら大和武士の面目にして、鬼畜となった蒙古軍を我が剣にて成仏させ給い……」

と通有は九州にて再会することを願った。この時代、武士も民も天性おもむくままの強烈な愛憎で活動した人々であったと想像される。他人より己の生活が一番であった。領民の命は路傍の石のごとくであった時代に時宗は、人間の憐れを体現しようとしたのである。

弘安四年、元・高麗軍を主力とした東路軍約四万、軍船九百艘、旧南宋軍を主力とした江南軍約一〇万および江軍船三五〇〇艘が日本に向けて出航した。元の官吏・王暉は、この日本侵攻軍の威勢を「随、唐以来、出師の盛なること、未だこれを見ざるなり」とその記事『汎海小録』の中で評している。合浦を出航した東路軍は六月

六日、博多湾に現れた。防塁の湾内は手強いとみて、元軍は志賀島、能古島に停泊した。

志賀島に上陸した元軍を陸路と海から攻入ることにして、通有は夜半に六丁櫓船に郎党六人、水手二人の小船三艘で元船に近づいた。湾内から沖に流れる潮の流れに乗って進んだ。すでに警戒していた元軍は石弓（クロスボウ）で防戦し、大竹を船の上から叩いたり、押し下りして乗船を阻止した。そこで火矢を射って混乱したところを乗り組むつもりであったが、勢いが盛んで近づけない。やむなく波間に漂っていると、一人が灯かりを落とした軍船数隻を見つけ、糧食船ではないかといった。二手に分かれ近寄り、左右から火矢を射ると、屋根に当たり燃えだした。水手の者や白頭巾が騒ぎ出したので、船から矢を射ると逃げ惑う者は射殺された。白頭巾は雇われた民間人であった。味方の小船は苦戦し、引き上げる者も出始めた。通有は功の一番となることを伊予の一宮に誓って出てきたのであった。

「次は首領格の船だ」

功を揚げてこそ一所懸命の働きである。通有は郎党に命じて探させた。海賊の伊予者は、夜目が利いていて、幸いにも盛んに燃えだした糧食船の脇を通り過ぎる軍船を見つけた。時刻は干潮で、喫水が下がった元船は動き

が鈍い。

「あれではないか」

郎党が騒ぐ視線の先に、モンゴルらしき黄色の旗を船首に立てた軍船を見つけた。船尾に鍵縄をかけ結び目に足指を挟んで、郎党二人が乗り込んだ。もう二隻は注意を逸らすために、火矢を盛んに射こんだ。郎党が投げた竹梯子に通有と郎党が続き、同士討ちがないように、先方の三人は槍で突き進み、通有と三人が刀を使う。槍から逃れた敵をなで斬りに進むと、明らかに身分の高い軍服をまとった男が逃げ出した。通有は躍りかかって捕まえた。船に連行して陣に戻ると、モンゴルの大將格と判明した。通有は矢傷を腕に負った。この時、時宗は八幡宮で卒倒し、目が覚めると、

「良かった、無事であった」

不明の言葉を漏らしたという。肥後国御家人竹崎季長は通有を見舞うと、戦法を問うて、船に乗り、肥後国一番の先駆けと認められたのであった。

遅れに遅れて江南軍が鷹島に到着したのが七月中旬であった。江南軍の一部は平戸島、鷹島に到着し、時宗は六月二十八日には九州および中国地方における、幕府の権

限の直接及ばない荘園の年貢を兵糧米として徴収することを朝廷に申し入れ、さらなる戦時動員体制を敷いた。

海上に群がる元船に小船に乗って攻撃を続ける武士団を蹴散らして江南軍主力が鷹島にいたった。七月三〇日夜半、台風が襲来した。高麗史によれば、生き残りの兵一万九三七九名と委細に伝えているのが不気味だが、凡そ十万以上が戦死したことになる。

「元賊は四明より海に出る。大船七千隻、七月半ば頃、倭国の白骨山（鷹島）に至る。土城を築き、駐兵して対壘する。三〇日に大風雨がおこり、雹の大きさは拳の如し。船は大浪のために沈壊してしまふ。蒙古軍は半ば海に没し、船はわずか四百餘隻のみ廻る。二〇万人は白骨山の上に置き去りにされ、海を渡って帰る船がなく、倭人のためにことごとく殺される。山の上に素より居る人の東征軍士はみなこの山にて死んだという。ゆえに白骨山という」（宗史の日本伝・鄭思肖）

日本軍は捕虜二万〜三万人を連行したという。通有は宋人を集めると漁船に乗せ、宇井に浮遊する遺体を集めさせ、壊れた元軍の舟板で死体を焼いた。その火は何か月も博多から見えた。元史には日本軍はモンゴル人と高麗人、および漢人の捕虜は殺害したが、交流のあった旧

南宋人の捕虜は命を助け、奴隷としたという記述があり、高麗史では命を助けられた捕虜は、工匠および農事に知識のある者となっている。なお、近年、大阪府和泉市内の寺所蔵の『大般若波羅蜜多經』經典の修正に弘安の役で投降した捕虜が修正に携わっていたという。修正に携わっていたのは江南軍に所属していた旧南宋軍人であった。河野通有は勲功の賞として、肥前国小崎郷を給付され、その後も鎌倉幕府から熊野浦々の海賊退治を命じられている。通有は追善のために自分の館を寺として、弘安の役後すぐに建立した長福寺に葬られた。

モンゴルが襲ってきたという報は、遠い鎌倉に届くころには、様々な噂が伴っていたであろう。

(日本は滅びるのではないか。九州は占領され、幾年も戦いが続くのではないか)

時宗は外出もせず、部屋に籠るようになった。人と会うのも避けるようになった。連署を務めた北条義正が病のため倒れると時宗独りで大事、小事すべてに命令を下し、昼夜政治に心を使い、休まる時がなかった。時宗は鶴岡八幡宮において頼助に異国降伏の祈禱を命じた。頼助は四代執権北条経時の次男として生まれ、経時が二三歳で没すると、後継者候補に挙げられたが、わずか三歳のため、兄とともに仏門に入れられた。修行の後、頼助

が京都仁和寺門跡から鎌倉に行くよう勧められたのは、身内として、気の安らぐ頼助を時宗が招いたに違いない。頼助は真言密教の血書経を勧めた。

己の血でもって写経するもので『汝が皮を紙とし、汝が骨を筆として、血をもって書くべし』からきている。時宗は指先に刃を入れるが、血は直ぐに乾き、そのため新たな血を墨皿に落としながら筆を動かす。

朝、沐浴し、朝餉は粥に汁物、胡麻塩、梅干し、沢庵は曹洞宗の本山である永平寺の開始道元の典座教訓からきている。修行僧のごとく、黙々と写経することで時宗は戦をし、元寇を調伏しているのである。この期間は弘安の役から頼助が鎌倉八幡宮の別当となる弘安六年の夏まで続いた。平安の時代から密教仏教でも僧は妻帯し、妻妾を替えていたとの記述があることから、

「妻妾をお側に置くべし」

と義父の安達義盛が案じて勧めた。時宗が倒れれば、混乱が起こり、外敵に立ち向かう幕府に乱れは許されない。八幡宮に籠る時宗の身体も精神も病んでいた。時宗には滋養として高麗人参、中国漢方を茶に煎じて入れられ、性欲が激昂し女人を求めた。女人こそ現生の生き仏であった。時宗が政務の苦しさから女人に精を果たす閨の瞬間こそ、日々の務めから解放された己を感じる時で

あった。遊女が白い直垂・水干に烏帽子、白鞘巻の刀をさすという男装で歌や舞を披露した白拍子は、義経の愛妾となった静御前の例があるように、知識と豊富な情報を持つ踊り子であった。時宗は鎌倉に巡業する新たな踊り子から地方の情報を探っていたのである。後の歴史家は、結核菌による性欲亢進が時宗の病状を悪化させたと推測する。時宗は心労が重なり病に侵され、北条一門初の鶴岡八幡宮別当を頼助に与えたのは間もなくであった。「いつまで続くと思われるか」

時宗の声は細く、胸の奥から息が漏れている声であった。其の問いに、頼助は、

「在るがままに」と答えた。

「在るがままとは如何に」

時宗は戸惑いつつ問うて、

「他力本願をひたすらに信ずるべし」

世の中のあるべき姿に近づけることではなく、己のすべきことを成すという。武力による解決は一時的なもので、仏の慈悲こそ成すべきにあり。

弘安四年閏七月九日、元軍壊滅の知らせが京都に届いた。鎌倉は情報を集め、戦勝の報告後も、油断なく防備を固めさせた。時宗はフビライが日本を手中におさめるまで何度も攻入するという情報を掴んでおり、事実、フビ

ライは高麗などに大小三〇〇艘の軍船建造を命令していたのである。

フビライは宋を征服した。日本もやがて滅ぼされる運命にあるのではないか。弘安五年、時宗は巨費を投じて、元寇で戦死した敵、味方兵士戦没者追悼のために無学祖元を招いて円覚寺を創建した。祖元は時宗に莫煩惱（煩悩を莫^なかれ）と書を与えたのである。時宗は禅の悟りにより精神を支えていたのだが、禅宗は悟りを開く事が目的とされており、悟りとは「生きるもの全てが本来持っている本性である仏性に気付く」ことをいう。では現実の答えをどのように導くべきか、日本の運命に勝利する道があるとすれば、人知を超えた能力を授かるしかない。「煩うな」と言われても煩い迷うのが人であろう。さらに国内に目をやると、文永の役、弘安の役の恩賞が定まらず、幕内の勢力争いで揺れ動いていたが、時宗生前においては治められていたのである。

仏教に逃れたい個人と、得宗としての相克はついに破綻する。

前年から衰弱激しく、北条業時を連署とした。弘安七年四月四日、病床にあった時宗は

「僧となって仏道の道に進みたい」

無学祖元を導師として禅興寺で落髮（出家）した際、

妻も共に落髪し、覺山志道大姉と安名した。時宗は妻の出家を宣言、同日逝去した。弘安七年四月四日、満三二歳であった。

北条九代記は書き記す。

文永元年から今年に至る二一年の間、天下の政道に日夜心を碎き、栄華の盛りも過ぎないで、命がたちまちお尽きになってしまったのは実に悲しいことであると。

サンガとはインド音声の出家者僧を呼ぶ意味に近いとされる。時宗は純粹な出家者となって、人々に教えを伝えていたのである。

刻まれた小さな文字の縁えじし

木原 佐瀬 智

「課長さん、賑わっていますね。何か？」

「先生、申し訳ありません。二時まで休診と伺っていますので……。新畑小学校の机、椅子の一部を向かいの埴谷の森アリーナの倉庫に一時預かって頂くことにしました」

児童数減により本年三月をもって新畑小学校が閉校となった。角掛つがけわたる渉教育課長の指示で職員と業者が片付けをしていたのだ。

「それはご苦労様です。気にかけてどうぞ」

笑顔で埴谷の森診療所の赤部朗あかべあき朗医師は応えた。患者だけでなく多くの人に笑顔を絶やさないう若き赤部医師は頗る評判の良い医師であった。眼を細め和やかな表情で市の職員と業者が片付けている様子を見守っている。

春の陽射しは心地良く、休憩を取っていた昼食後の病院関係者は、移動で賑わい始めた喧騒で閉じかけた賑がスイッチオンになったように見開き始めた。小学校の机、椅子に郷愁を覚えたのか懐かしそうに移動を見守り始めたのである。

赤部医師も机、椅子の移動を見守っていたのだが尋常

でない眼差しで椅子、机に触れ始めたのである。角掛教育課長は赤部医師に反応した。

「赤部先生、どうかされましたか？」

ハツとした赤部医師は、動揺を悟られまいとするかのように

「いや、懐かしいなと思ったもので……。課長さん、もし宜しかったらこの机と椅子一對、頂けませんか。ご存じのように子どもたちは注射を嫌い私が腕に振れると極度に緊張するんですよ。学校の机、椅子を使えば少しは気持ちほぐれるかもしれません」と、温和な眼差しで角掛教育課長に応えた。

「どうぞどうぞ先生。一對と言わず好きなだけどうぞ。

何でしたら私どもが診察室に移動しましょうか？」

「ありがとうございます。もしかしたらもう一對くらい頂くかもしれません。助かります」

もしかしたらもう一對くらい……という云々は赤部医師の社交辞令の言葉とは知らず、人の良い教育課長は心から使用してもらいたいと願った。机、椅子の移動が瞬く間に終了した。診察の時間までには余裕があった。

赤部医師は職員にカモフラージュするかのように……ここで良いか……と小さい声で独り言を呟き移動した当の机、椅子を確認し始めた。

「先生、除菌し綺麗にしておきますね」

吉沢緑看護師が早速午後の診察に間に合うように配置してくれた。改めて確認するかのように見直した赤部医師は「こんなことがあるんだ」と、内心感動していたのである。

時の刻みが過去へフル回転し始めた。

ガシャーン！もの凄い勢いで机、椅子が三人グループの前に転がり込んできた。

「お前等！相手が一人だと思って、許さないぞ。無事で済むと思うなよ」

三人組はモップを手にした恐れを知らない戸鉢健とばちたけしに震えた。正義感が強く怒りだしたら手が付けられないことを良く知っていたのだ。転入したばかりの赤部も噂で知っていた。

「わくわく、俺等だつてやりたくないんだよ」

叫きながら一目散に逃げていったのである。戸鉢は追いかけることもなく首を傾げた。訳分かんねえな…と戸鉢は思った。

「ありがとう。僕をどうかしようとしていじめた訳じゃないよ。ケガをさせないことは分かっているんだ。これで済んだと思うよ」

戸鉢は益々訳が分からなくなってしまった。気にはなつたが問い詰める術を知る程の知恵が備わっている年齢ではなかった。しかも、その子は戸鉢が校内で見かけたことがなかったのである。転入生だろうと思った。始業式で新しい友だちが紹介されたのであろうが、物覚えの悪い自分は見過ごしたのであろうと戸鉢は思った。同年であれば二組に入ったことになる。

その日の一日前に転入したことを知るようになるのはずっと後になってからである。時に二〇一一年四月二十七日、木曜日のことであつた。さらに不可解なことは五月八日の月曜日には転校してしまつたのである。これもまたずっと後になってから戸鉢の知るところとなつた。ゴールデンウィーク前に転入、ゴールデンウィーク後には転出、実際学校に来たのは三日ないし四日間ということになる。

瞬く間に戸鉢の記憶からその子のことが消えていったのは当然だつた。自分のクラスでない限り多くの児童の記憶には残らない、つまりは覚えのない子ということになる。

貿易商社に勤めている朗の父がアメリカニューヨーク支店に勤務することになつたのは朗が四年生の時だつた。中途半端な時期だつた。それでも母は木原の祖父母の存

在を記憶に留めさせようとして、夫の同意を得て一時木原にやってきた。

従姉の尾高明菜は気立てが良い上に勉強や運動も良くてできた。しかし同学年の周囲の者はガキ大将の戸鉢以外は勉強、運動に全く適わない明菜におもねるように追従するようになったのである。気が付くと男子も束ね学年の女王のように君臨し、明姉と呼ばれていた。

そこへ朗がやって来た。別棟で祖父母と一緒に住み始めた朗は明菜以上に何でもできた。明菜は嫉妬した。明姉に諂い媚びる三羽ガラスの腕白が、朗に群がり意地悪を始めたのである。腕白ギャングたちは、明菜の従弟である朗のことをわきまえケガをさせるようないじめはしなかった。

…あの時の「戸鉢健君の机と椅子だ……」

朗は直ぐ分かった。あの日、朗は礼も言わず、さようならの言葉を述べることもなく転校してしまった。誰にも言わず彼の机と椅子の裏にマジックペンで小さく「ありがとう戸鉢君・A」と小さな文字を刻んだ。新畑小学校での唯一の思い出の一コマであった。

「完璧だな！」

鳥海進教諭はこの一ヶ月で口癖となった言葉を吐いた。

二〇一五年、中学二年の三月に転入してきた生徒だ。四年前東日本大震災の津波に遭い、逃れるように岩手県大船渡市から親戚を頼り、山武市木原にやってきた。新畑小学校に数日在籍後、父の海外勤務の都合によって海外生活を経て中途半端なこの時期に雨坪中学校へ転入してきたのだった。

鳥海教諭は、受験に備え過去問や予想される入試問題を次から次に作成し生徒に実施した。持ち上がり三年目を迎え、生徒のレベルはかなり高くなった。しかし、この三月に転入してきた生徒のレベルは別格であった。三回目程になった時に「完璧だな！」と確信した。いつしか、転入生の解答用紙が完璧であることを確認し、それをもとに採点するようになったのである。これまでのテストで間違いを記した答案は一つもなかった。つまり全てパーフェクトであったのである。

夏休み前であった。

「無理には言わない。また絶対には言わない。一ヶ月以上の休みは好機到来と思つて受験勉強に徹すればそれなりの効果が必ず出る。それと、休みの日の私の動態はプリントの通りだ。相談したい事があればいつでも学校に来てくれ。夏休みを制する者は受験を制する」と言つて鳥海教諭は受け持ちの生徒たちを激励し、夏休みの

健闘を祈った。

「何だって！」

鳥海教諭は驚愕した。眩しい太陽が容赦なくグラウンドを照射し、鉄板のように暑くなっている。気温は既に三七度に達しているかも知れない。先程職員室を出る時には三四度であった。「先生だけに相談したい…」と言ったのでグラウンドの木陰にやって来た。それにしても暑い。もう一〇分以上は過ぎていく。

「高校卒業の資格は自力で得たいと思っています。そのため働く場所を考えています」

三月に転入してきた事情がよく分かった。考えれば成る程と思いつつやり切れないジレンマに陥ったのは当の生徒の方であったのだ。鳥海教諭は生徒のために最大限やれるべきことを考えたが思いつかない。パーフェクトな生徒だけに行く末を期待しているのは家族も同じであろう…と考え、まずは家庭訪問し母の意向も訊くことにした。

父の遺影に手を合わせた後、率直に本人及び母に向かい訊ねた。

貿易商社に勤めていた父が、一旦実家の岩手県大船渡市に落ち着いたのは六年前のことであった。都内の会社

の宿舍では家族団欒と考えたが、海の青さと緑の茂る自然を焼き付けさせたいと考えた。父は、家族を大船渡市に残し、都内に単身赴任した。週末の家族団欒の思い出は家族に取ってかけがえないものだったのだ。

しかし、父の実家には父の兄夫婦とその子どもたちがおり、居場所の居心地の悪さは誤算だった。祖父母は可愛がってくれたが、伯母と従兄弟たちは歓迎してくれなかったのだ。母はどうすることもできず途方に暮れた。

正月に帰ってきた父が

「それなら春から都内の小学校に転校手続きを取るのもう少し辛抱してくれ」

留守がちの父が妻、子どもに理解を求め微笑んだ。

三月の三陸海岸はまだまだ風が冷たく、往く人々の顔を容赦なく叩いた。追い打ちをかけるように転校を急がせる出来事が襲った。予測しなかった悲劇の訪れであった。

二〇一一年三月一日、一四時四六分発生の東日本大震災(東北地方太平洋沖地震↓気象庁が発生後に命名)で

ある。宮城県北部の栗原市では最大震度七が観測された。

テレビで映し出される太平洋沖の大津波被害は見る者に言葉を詰まらせた。さらに福島第一原子力発電所の事故は放射性物質が大量に放出され福島県民は避難を余儀なくされた。

「貴方、朗も私も奇跡的に助かったけれどお義父さんもお義母さんもお義兄さんたち一家も……もうもう……津波で行方不明で……」後は言葉にならなかつた。

「貴方、都内の学校に転校する前にちよつとで良いから木原に行かせて……お願い」

夫は妻の良いようにさせるのが賢明と悟つた。夫の両親家族を失う現実を目の当たりにした妻への労りの言葉が見つからず自分も途方に暮れた。朗は母の願いでひとまず五年生の時に木原にやつて来たのだった。

人は他人に言い尽くせぬ苦しみを抱えている。分かち合える絆ができた時こそ他人への感謝が生じる。朗は哀しみを抱えたまま新畑小学校に転入して来た。母は短い期間であるが実家の木原、祖父母の傍で過ごさせたいと考えた。哀しみに落ち込む父母の気持ちに幼い朗にも理解できた。親子共々五月の連休明けまでの決意で新畑小学校に転校して来たのだった。転校手続きが遅れた上に連休の間で転入、転校となつてしまった。

五月からは狭い都内の会社の社宅になるが、家族水入らずの生活になる。それを楽しみにしていた矢先だった。「君には本当に済まないと思つている。まさかこんな時にまた海外勤務の辞令が降りると思つていなかった。申し訳ない」

夫は謝り続けた。それでも母は、子どもが成長し、両親の双方の実家に想いを馳せることができればと願つた。また短い期間でも海外や大船渡、木原の地で過ごした経験を将来に生かせればと考えたのである。

こうして朗はロンドンでの生活を余儀なくされた。海外生活を順調満帆に過ごし、いよいよ父の帰国を迎えようとしていた時であつた。日本の学期に合わせようと母と朗は一足早く四月に日本に戻る予定でいた。しかし、不運は予測なくやつて来た。

父が心筋梗塞で倒れたのだ。帰国準備どころではなくなつた。茶毘に付し、母も朗も悲しむ暇もなく遺骨を抱き、日本の途に就いた。区切りの望ましくない中学二年の時期に雨坪中学校へ転入してきたのであつた。

母の本当の疲労困憊の始まりは木原に着いてからだった。

朗にとつて木原の思い出は自分の原点だと思つている。母の苦しき、寂しき、辛さを想像するにつけ、どんなに恩返しを尽くそうと尽くしきれない自分の儂さを思つた。鳥海教諭は半ば怒りにも似た目を射るように朗を睨んだ。

「良いか、赤部。学歴が全てとは言わない。学力を自慢しろとも言わない。でもあつて困るものではない。ない

よりはあった方が良くに決まっている。お前にはそれだけのものがあるんだ。将来なりたいものがあるのか」と、朗に詰め寄った。

「医学が今より進歩していれば父は逝かずに済んだかも知れませんが。医師になりたいと思っはいます。しかし……」

「成れる。朗なら成れる。資金がないなんて言うんじゃない！」

鳥海教諭は目に涙を浮かべながら諭すように熱く言い続けた。

山武市の奨学金制度に触れ、一定期間山武市の医師として勤務すれば返済の免除が可能であることも示唆された。他の奨学金制度も調べて見るとも言ってくれた。

朗は、この十数年の出来事を走馬灯のように想い出していた。大船渡市への転出後間もなく東日本大震災によって木原への引越し、父が勤務する都内へ、更に予期していなかった父が再度の海外勤務の辞令、海外勤務の最中、心筋梗塞と続き、為す術のない運命に母と共に翻弄し涙したことも鮮明に覚えている。

朗は机、椅子を見つめ鳥海進先生を想い出していた。先生の薦めがなかったら今の自分はあり得ない。母方の祖母からの精一杯の支援、山武市からの奨学金の援助

を受け昨年から若き医師として診療所に勤務している

「先生、この頃仕事始めるとすぐへばって農作業にならないんですよ。元氣のする注射でも打つてくれませんか？」

それは思いがけない邂逅であった。

「赤部先生、戸鉢さんのレントゲンと血液検査の結果です」

看護師の吉沢緑が手渡してくれた検査一覽を診た赤部は「まさか」と疑った。

当然であったが戸鉢は全く同級の赤部医師のことを覚えていなかった。赤部も診療所での再会の喜びを告げる雰囲気ではなかった。とにかく朗は一通り戸鉢の内診を済ませた。レントゲンと血液検査の結果から自分なりの診断を、成東医療センターの尊敬する二期先輩の栗林満外科医師に診て貰うことにした。

「戸鉢さん、その後具合はどうですか？」

「特に変わりませんよ。仕事はじめると息が切れるんですよ。これから田植え、スイカ作りと続き大変なんですよ。休む訳にはいかなんですよ。何とかありませんか」

「戸鉢さん、身体からだ第一です。今は仕事のことを考えず結果が出るまでゆっくりして……」

「冗談じゃありませんよ！」

少年時代の戸鉢を彷彿とさせるような言葉で、家族を

路頭に迷わせることはできないと喰って掛かれた。

右の肺が驚く程の白さでレントゲン映像で写し出されていた。時間の余裕はない。すぐ緊急の診察をし、手術が必要と赤部は判断した。栗林医師とコンタクトを取った。「さすが赤部だな。早急にセンターに回してくれ。準備ができ次第オペだ。任せてくれ。転移していなければ助かる……と信じたい」

レントゲン画像を見た栗林医師は応えた。

問題は戸鉢本人だった。何せ「入院どころではない」と言う。農家の最も忙しい時にのんびり病院のベッドで過ごして居られない、というのが本音であった。

信じられないことが起こった。

「大将、自分の身体、命があつての家族だろうが。我が儘言わず素直に入院しろ」

同級生の薄井秀雄、高木元、石橋匠の三羽ガラスが怒鳴り込んで来た。

「秋の稲刈りが終わったらゆっくり治療するよ。今休む訳にはいかないんだよ。それぐらいお前等だつて分かるだろう。同業なんだから。気持ちだけ聞いておくよ。ありがとうな」

「馬鹿野郎。いつまで寝ぼけたことを言つてんだ。秋までに俺等がお前の代わりにスイカ、米を作っておくよ。」

安心しろ。もちろんお礼なんか入らねーぞ。分かつたら即準備だ」

戸鉢は耳を疑つた。特に薄井は今年新品のトラクターを購入したとのこと。年に一〇日前後しか働かず後は掃除、点検をし納屋に眠らせて置くのはもったいない。お前の田んぼで活躍させたいもんだ、と告げられた。

三人が笑顔で戸鉢に語り、本当に見返りなんて無用なのだと言う。正直、戸鉢は不安であつたのだ。何の違和感もなく話す三人の言葉で戸鉢は胸が熱くなつた。気の合う幼馴染みの同級生であつたが、改めて今感動の気持ちで目頭から涙がこぼれ落ちた。

「何だ？何だ？大将。ガキ大将のお前が俺等の優しい声掛けで泣いているのか？」

「馬鹿野郎、俺の田んぼ、畑は広いぞ……」

「三人でやれば訳はねえ。チョロいもんだ」

後は言葉にならなかつた。戸鉢の頬を伝う涙を見て薄井、高木、石橋の三羽ガラスも涙腺が緩み出した。即入院の手筈となつた。

「三人に急ぎのお願いがあるんだけど」

明姉は健在だつた。山武市内で司法書士をしている尾高明菜から連絡があつたのは昨日のことであつた。大将

の戸鉢が肺癌になり緊急の手術が必要だが本人が拒否しているということであった。彼を助けることができるのは薄井、高木、石橋の三人だけだと言いつめ寄せられた。明菜には土地がらみの込み入った問題では一方ならぬ面倒をかけ解決してもらった。山武市の都市計画で偶然にも薄井、高木、石橋の農地が複雑に絡みあったのだ。女王は難なく三人に納得できるように解決してくれた。書類の手続きも完璧にやってくれた。

肺癌が見つかったが農作業を休む訳にはいかないと緊急手術を拒否している。戸鉢に手を焼いている、と朗から明菜に連絡が入ったのである。人間関係は子どもの頃と変わらず一緒であった。だから個人情報保護法には構わず戸鉢を助きたい一心であったのだ。明菜は三人組に仔細を話し何とかして欲しいと懇願した。三人組の考えに明菜は目頭を熱くした。男の友情を羨ましくも思った。ただ、朗のことは明菜が話すのでしばらくは伏せてくれることであった。

自分の嫉妬から小学校の時、従弟の朗を懲らしめてやるうとしたことが昨日のことに思い出された。明菜は心の中で赤面した。偶然にも戸鉢から逆襲された三人組がその戸鉢を助ける縁に驚き胸が熱くなった。

結果、戸鉢の肺癌は転移が見つからず何の問題もなく

無事に終えた。

季節は春から初夏へと移っていた。

戸鉢は一ヶ月もかからず退院して再び農作業に従事していた。無理はしないようにと助言を受けた。三羽ガラスが農業を手助け、上手くセーブしてくれた。深酒でなければと、酒もちびりちびり始めた。四人で味わう酒は格別であった。医学の進歩に感謝した。

「何を言ってるの！医学の進歩もそうだけど赤部医師に、嫌同級生に感謝しなきゃ」

「分かてるよ。何かと明姉が面倒みてる薄井等コンビには頭が上がりなくなったよ」

幼馴染みの絆は今も強く結ばれていた。

二時までの休診の間、赤部医師は埴谷の森の図書館で読書三昧をするためにやって来た。

見渡すと高齢者の五、六人が午後のひとときを各々のカプセルの中で本と対峙していた。どんな本を読んでいるのだろうか。小説、詩、評論、俳句、短歌等々に想いを馳せる。静かに流れる時間が愛おしくなる。

赤部医師は祖母を思い出した。時間に余裕がなかったのに合間、合間に読書をしていた。

「朗や、図書館に行けば本を買わなくて無料で読めるんだよ。これ程有り難いことはないよ。無料だよ。読んだら返せば良いだけ」

と口癖のように言っていたのを覚えている。

祖母の愛読していた市民文集「文芸さんむ」があった。多くは高齢者の投稿である。

「若い人が、八〇代の人が書いた文章を読むことは大変良いことだよ。朗も読んでみて」

いつも声高に言っていた祖母を思い出した。朗は詩のコーナーに目を留めた。

略：日の出が／米一粒ずつ早くなっているという／
一月末もう何粒位／早くなったのだろうか：略：／
春の訪れを待っているのは／私だけではない：略：／
春よこい／早くこい略：今年は少し違う／夫の病／
早六年：略：春よこい／早くこい

（「文芸さんむ」第一六号 遠藤三千代氏の「春よこい」より）

朗は祖母や母の膝の上で聴かされた幼き日の童謡を懐かしく想い出していた。春に因んだひととおりの童謡は今でも口ずさむことができる。無邪気に歌う子どもの声は聴く大人たちには（朗には）郷愁へと誘われる。躍動する春の到来を待ち侘びる心情が子どもの声と重なり胸

が熱くなる想いだ。

遠藤三千代氏の「春よこい」は趣が違う。第一連、第二連の前半までは春の到来を心から喜ぶ心情が読み取れる。「日の出が米一粒ずつ早くなっているという」表現の素晴らしさに心を奪われる。感動し胸が躍る。しかし、一転して「春を待っているのは：」で読む者（朗）に、もはや健やかな成長を願う「みいちゃんの声が」という童謡の歌どころではない不安が広がり、やがて「多くの病を持っている人は」での一人が夫であることを知る。

「夫の病 早六年」で「春よこい 早くこい」という春に望みを託す願いを込めた遠藤氏の心理が、リズムカルなテンポだけに一層切なく悲しく伝わってくる。新井白石の父が学問の教えを米粒に例えたのとは異にし、米粒ごとに少しずつ暖かくなる日の出を待ち侘びる遠藤氏の夫へ寄せる苦渋の嗚咽、行き場のない慟哭が聞こえ、深い愛情が胸を打つ。

詩に触れ、赤部朗は医師としての原点を改めて想い出した。

医師を志したのは父の死であった。今思うと父は定期的な検診を受けていれば救えた命であったかも知れない。怠っていたのは父ではない。病魔への対応は医師の責務である。血液検査の対応を把握しきれなかった体制に問

題があると思つてゐる。小学校での東日本大震災時の経験が目には焼き付いてゐる。体育館で寒さに震え、大泣きしてゐる多くの子どもや高齢者の人々が忘れられない。「春よこい」と願つたことが詩のフレーズと重なる。

赤兎から高齢者まであまねく心に寄り添つて診てあげられる医師になるのが朗の夢、決意であつた。原点は讀書のお陰である。その讀書を薦めた祖母に改めて感謝した。遠藤氏の夫の快復を願いながらも一度「春よこい」を読み味わい、胸に刻んだ。

「明姉、教えてくれよ。もうすっかり身体は問題ない。赤部先生と薄井等の關係を」

「分かつたわ。その前にもう明姉と言わないでよ。大将」というと戸鉢も大将と言ふなと返され、二人は笑つた。

「戸鉢さん：何か変ね」「それで良いんだよ」「本当に覚えていないの?」「知らないよ。明葉さん：何か変だな」「それで良いわよ」

今度は大きな声を出して笑い合つた。

「赤部医師は私の従弟よ。小学校の時、東日本大震災に遭い、大船渡市から逃れて新畑小学校に転入して来たのよ。それで…」

戸鉢健は尾高明葉から経緯を聞かされた。三羽ガラス

が朗をケガさせないように虐めた事も知らなければ赤部医師が転入、転出したことも知らなかつた。三人を喧嘩腰に制止したことさえも記憶になかつたのだつた。

「本当だ!」赤部医師に気付かれないように定期検診を終えた戸鉢は机、椅子の裏側をそつと覗き込んだ。「ありがとう戸鉢君・A」

：Aとは朗医師のイニシャルである。刻まれた郷愁の小さな文字の縁に胸が熱くなつた。

「戸鉢さん、今度は三ヶ月後に来てください。緊急の時はこちらから連絡させて頂きます。そんな心配はないと思います」と、微笑んで対応する赤部医師に戸鉢は心から感謝した。

診察を終え、朗は一服のコーヒーを喫し窓の外を見た。従弟の明葉と三羽ガラスが戸鉢を迎えている。「安心だ」とでも喜び合つてゐるのだろうと思つた。

降り注ぐ太陽の下で満面の笑顔で語らう五人が眩しかつた。明姉、大将と呼び合う元の言い方に戻つた事など朗は知る由もなかつた。

原っぱに行かなくちゃ

東金市(元市内在勤) 木村 一夫

一九五五年。アジア太平洋戦争敗戦から十年後の夏。

《サッチモまじないの言葉》

ちいずけいく

がふがふ

ちいずけいく

がふがふ

ちいずけいく

すべての子どもたちに煙突よりも高さ愛を。

東京湾に流れてゆく川ぞいの安北町に、両親と八歳のぼくと三歳のマブという名の妹の家族が暮していました。

ある日。父さんが三歳年下の弟からもらってきたというラジオには、たまげるほどよろこびました。そのみがき上げた木の箱は、戸だなの上にくちんに置くことのできる大きさなのですが、まるいダイヤルが二つと約二センチのスイッチがついていました。

スイッチを上げると、裏ぶたの穴から真空かんがゆらめきながらとりました。

じきにぼくは、ラッパの音とともに、おしゃべりをす

るように歌うサッチモの音楽のとりこになりました。

ぼくの父さんは、戦争によるトラウマという精神の後いしようとう左腕がはげしくふるえ続ける神経の障害に苦しめられました。

どうやら「戦争神経症」と名づけられていたようです。きまったように夜中に。戦争体験のおそろしい夢から体全体をふるわせながら、大声で動物のように叫びます。母さんが、どうしたら良いのか分らず泣きながらたしなめると、やがて、さわぎはひとまず治まるのですが、気の小さなぼくは、ただ恐れて眠っているふりをするばかりでした。

戦争による心の傷あとに悩まされる人々の特徴として伝えられることがあります。ぼくの父さんも戦争の体験を子どもに語ることはありませんでした。

やがて六年後には公立中学校が建つことになる、ぼくたちが住んでいる土地には、間口(家のはば)が約二・七M、奥ゆき(家の長さ)が約五・四Mの、六畳の部屋と押し入れ、便所、流し場のある木造の小さな家が百戸ちかく立ち並んでいました。

小さな家々に住む人々には家の数よりも多くの物語があったことでしょう。きっと、家の数ほど、おそらくそ

れより多くの、戦争によるひ害を受けて焼け出されてしまった家族たちのための住宅の群だったのです。

白くぬられたとびらが、はばの広い廊下の左右に数かぎりなくならんで続く小さな部屋のとびらが、開いたり閉めたりするたびに、キィイツとぶきみな音をたてる……それはたぶん病院の診察室にちがいないという記憶しかないのですから、ぼくが四歳のころだと思うのですが、電車をいくつか乗りつぎながら、父さんと二人だけで病院に行ったことがあります。

その時のおぼえからは、父さんの病気のことに、なにひとつえられませんが、ぼくの十歳の秋の日。父さんは、三歳年下のおじさんに抱きかかえられながら、小さな家から出てゆきました。

暗い一日のみじかい時間の場面だったのですが、ぼくは、父さんと別れてしまうことをなぜかなくとくしたのです。

父さんの病気の体のこと。仕事をすることができないために稼ぎがないこと。母さんにとつても、社会の人々が見る父さんへの態度がづらいこと。さまざまに、ぼくたちの家族を切りはなしてゆくことになりました。

すでに中学を建設する工事のため立退きが終り、ぼくたちが、原っぱとよんでいるあき地がありました。住

む人がいない家はつぎつぎとこわされてゆきました。

家にはしごをかけると、屋根は、コールタールをぬった紙のような材料だったのですが、またたくまに巻き取られ、ほこりの中で、かけ声とともにロープでくくられて倒される柱。ボールとよばれる釘ぬきをかねた長い鉄ぼうではたき落とされるかべ板。

ひっぱがされる雨戸や戸袋、天井板、おどるようにはねる畳、トタン板のきしむ音などがリズムに乗って、順じょよく積み重ねながら、かたづけられてゆくのです。

最後の仕上げは、便所のくみ取り用の便つぼを掘り出して三輪タイヤのトラックの荷台に積みこむと作業は終了です。

どうしたことか。ぼくは、こんな工事の場面に出くわすと、自分が家をこわしているかのように、胸が高なり、わくわくしながら見つめていました。

家がとりこわされてしまうということは、そのために、ひっこしをしてしまった友だちのことも思いうかべます。それなのに、ぼくたちが住んでいた家をこわすときには、どこかの運のいいやつが見ているのかな。と思うのです。

まだ原っぱには、あふれかえるほどの子どもたちが遊んでいたころ。

小学校の低学年から上級生の子たちがまざりあって、野球あそびをしていました。

布をまるめたボールと、丸太ん棒をけずったバットをふりまわして、なかまをつのるようにかん声をあげていました。

なかまの中でも、ひとりだけバットを持っているコトチャンは、いつものようにラジオ放送のアナウンサーのまねをしながら、

「光治くん、打席に入りました。バットでホームベースをポンとたたいて相手ピッチャーをにらむとバットの先を外野スタンドに向きました。第一球。ピッチャーのごう速球をよゆうの表じょうで見のがすと、タイムをかけてバッターボックスを外します」すると、解説者の物まねで、

「なんともうしましうか。ホームランを打ちそうな気がいたしますねえ」なんてね。

相手チームができるほど子どもがいればいいけど、たとえば二人きりでも空想をまじえながら、打ったボールのスピードやポンと落ちたボールの位置でショートゴロだとか、センターフライと言い合いながら決めてゆくのです。

ある日。ぼくは、原っぱに行くところを妹のマブにつ

かまって、ままごと遊びのお人形さんにさせられてしまいました。

「あのな、マブ。あんちゃんは原っぱに行かなくちゃいけないんだ」

「いいの、いいの」

マブは、ぼくの丸太ん棒のバットを放りなげてしまう

と、花がらの布やふるしきを、ぼくの首にまきつけるのです。

「マブ、みんなが笑ってるんだぜ」

すると、母さんの口ぶりをまねて、

「いいんです。いうことをきかないと、メッてしますよ」

マブはほんとはこわい子なんです。とくに泣いたり、おこらせたりしてしまうと、とてもぼくの手にはおえません。

原っぱをめざして集まるともだちの一団がぼくたちを見て、にこにこしながら、とおりすぎてゆきました。

そして、引越してゆくともだちも、ひとり欠け、ふたり欠け、

とうとう父さんとも別れました。

いよいよ母さんとぼくたち二人が引越しをする日。少なくなつた近所の人々が手伝ってくれて、オート三輪の

荷台に積みこみが始まりました。

もういつぺんいつも遊んでいた原っぱを見ておきたくて、ぼくはマブをさそいました。役所の人が指示しながら、少しでも工事がすすめられましたが、夏草が生いしげる原っぱは生命力にあふれていました。

ぼくたちより先に引越した家のあとは、「立入禁止」の立て看板が、教室の机のように、同じ間かくにならんでいました。

原っぱの向こうから、ぼくたちをせかす母さんの声が聞こえてきました。

「ちよつとだけ不安だけど」

新しい町の見知らぬ原っぱに行かなくちゃ。

すると、ぼくの大好きなサッチモのラッパとまじないの歌声が町中にひびきました。

ちいずけいく

がふがふ

ちいずけいく

がふがふ

ちいずけいく